# アンネの「影」の70年

## 義理の姉 ナチス強制収容所体験語る

世界発 2015

### 近寄りがたい「オーラ」

「アンネの日記」―☞―で知られるアンネ・フランク（1929～45）の「影」と呼ばれたユダヤ人女性がいる。同い年の友人で、後に義理の姉となるエバ・シュロスさん(86)。アンネはナチスの強制収容所で命を落としたが、エバさんは生還した。戦後70年の今、義妹アンネへの複雑な思いと激動の半生を語った。

「アンネには、少女とは思えない、どこか近寄りがたいオーラがあった」

ロンドン市内の自宅で4月、エバさんはアンネとの数奇な縁を語り始めた。

エバさんは1929年5月、ウィーンで製靴工場を営むユダヤ人中流家庭に生まれた。両親と3歳年上の兄との穏やかな暮らしに暗雲が垂れこめたのは33年、エバさん4歳の頃。隣国ドイツにヒトラー政権が誕生し、ユダヤ人排斥のうねりは欧州に広がっていた。

10歳になった39年、第2次大戦が勃発。一家は迫われるように、オランダのアムステルダムに移り住んだ。近所に住んでいたのが、同い年のアンネ・フランクだった。

「アンネはファッションやヘアスタイル、男の子にも興味があった。うぬぼれも強く、おしゃべり。私とは正反対だった」と、当時を振り返る。アンネは「友人の一人」に過ぎなかった。その後、2人の人生が複雑に絡み合うことなど予想もしなかった。

まもなく、オランダにも独軍が侵攻。エバさん一家は抵抗組織の助けで、隠れ家に潜んだ。同様に身を隠したアンネに会うこともなくなった。潜伏生活が2年余り続いたある朝、「密告」を受けたナチス親衛隊に踏み込まれる。

**アンネの日記**

アンネ・フランクはナチスのユダヤ人迫害から逃れるため、アムステルダムの隠れ家に家族とともにこもった。44年に逮捕され、ドイツの強制収容所で15歳の生涯を閉じた。隠れ家での生活、戦争や家族への思いをつづった日記は世界的ベストセラーになり、60以上の言語に翻訳されている。

### 毒ガスおびえる日々

一家は拷問にも等しい取り調べを受け、ポーランド南部のアウシュビッツ強制収容所へ。最愛の父と兄から引き離され、エバさんは母のエルフリーデさんと共に近くのビルケナウ強制収容所に入れられ、飢餓と過酷な強制労働でやせ衰えていった。シャワー室に入れられるたびに「毒ガス」におびえ続ける日々。便所はバケツ1個。5人が一つのコップで奪い合うようにスープをすすった。

### 親の再婚で姉妹に

収容から約8カ月後の45年1月27日、ソ連軍が収容所を解放。エバさんは九死に一生を得た喜びをかみしめる間もなく、父と兄の悲報を知る。「兄は終戦の約1カ月前、父はわずか3日前に力尽きた。私と母が無事なことも知らずに」

アンネも独北部の収容所で命を落としたが、生き延びたアンネの父オットーさんが戦後、エルフリーデさんと再婚。エバさんはアンネと義理の姉妹となった。

「重荷だった。その後の私の人生は、まさに『アンネの影』だった」

### 嫉妬を捨て「日記」の続編

「アンネの日記」がオランダで初出版されたのは終戦直後の47年。その後、世界中に広まったが、そこには父オットーさんの熱心な「宣伝」があったという。

「オットーは、アンネを救えなかった自分を責め続けた。アンネが残したメッセージに救いを求めた」と、エバさんは考える。

だが、当時のエバさんの心に、アンネの言葉は「響かなかった」。アンネが日記の中で「人間の本性は善だと信じている」と吐露するが、エバさんは「収容所での経験をする前に書かれたものだから」と思わずにはいられなかった。収容所には冷酷なナチス将校だけでなく、生き残るためには他人を顧みない収容者もいた。極限状態の「人間の本性」を見せつけられた。

エバさんの憎悪は、ナチスの残虐行為を止められなかった「世界」にも向けられた。アンネに執着する継父オットーさんへの複雑な思いもあった。心の中に渦巻くどす黒い感情。「この世にいないアンネばかり注目され、生き残った私は苦しみを抱えて生きている。それが許せなかった」

### 「人を憎めば惨めに」

救いの手を差し伸べたのは、他ならぬオットーさん。「人を憎めば自分を惨めにするだけだ」とエバさんに諭し続けた。いてついた心はぬくもりを取り戻していった。「私はアンネに嫉妬していたのです」

エバさんは収容所体験を人前で語ろうとはしなかった。転機は40年以上たった86年。ロンドンで「アンネの日記」のイベントに招かれ、促されるままに収容所体験を初めて告白した。聴衆は衝撃を受け、「アンネの続編」を書いて欲しいという依頼が殺到。迷った末、受け入れた。「アンネの日記は素晴らしいが、収容所のことは書かれていない。それだけでは真のホロコースト（ユダヤ人らの大量虐殺）を伝えることはできない」と考えたからだ。

戦後70年の今年、エバさんは各地のイベントや学校で講演している。ドイツ人の若い世代に、こう諭す。

「祖父母のしたことに罪の意識を感じることはない。ただ歴史を学び、それを忘れないでいてほしい」

（ロンドン＝玉川透）

幼い頃のエバ・シュロスさん＝本人提供

家族の写真を入れた「家系図」のオブジェを手に、強制収容所での体験を語るエバ・シュロスさん＝4月、ロンドン、玉川透撮影

## 香港の学者、自作の小説中に「天安門事件」

# 講義の打診、突然キャンセル

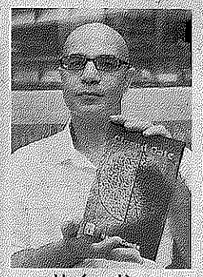
発生から26年を迎えた天安門事件について自作の小説で触れた香港の学者が、いったん決まった北京の大学での講義を取り消された。学生の民主化運動を「動乱」とする評価を変えていない中国政府が、今も神経質になっていることがうかがえる。

エジプト出身で香港在住の作家サイード・グーダさん(47)。香港の大学で文学を教えていた昨年12月、北京の大学から今年3～7月に比較文学を教えてほしいと打診があった。メールで条件をやりとりし、スカイプを通じて面接も終了。「万事OK」と言われた。だが、1月下旬に突然、「滞在資格の問題が起き、これ以上話を進められない」と取り消された。

1988年から2年間、北京に留学し、中国語が流暢なグーダさん。香港で20年以上暮らし、2009年には中国籍を取得。中国で働くことに大きな問題はないはずだった。

思い当たることが一つあった。取り消しの連絡が来る10日ほど前、新作小説の出版発表会を香港で開いた。89年の北京に留学していたパレスチナ人青年が主人公。イスラエルとの戦争で故郷を失った青年が中国を第二の故郷と思い定めたのに、天安門事件で国外退去を求められる。人間にとって故郷とは何かを主題にした。

「中国政府批判など全くしていない。89年の北京を描くのに、天安門事件に触れないことはあり得ない」



サイード・グーダさん

それ以来、自身のメールがたびたびハッキングされ、小説について触れたメールは相手に届かなくなった。自身のウェブサイトのトップページも開けなくなった。

グーダさんは今、欧米に職を求めている。「香港も中国政府にコントロールされ始め、将来に希望が持てない。経済発展はよいが、言論の自由がなければ世界のよき市民にはなれない。残念だけど、受け入れてくれる大学があれば香港を出るつもり」と話す。

（香港＝延与光貞）

## 特派員メモ

### イパネマの乱射

◆リオデジャネイロ

バンバンバン――。ンを鳴らすパトカードで目の前の交差した直後、銃声が響いた。ブラジルに出張したジャネイロが誇るビのレストラン「イ娘」で食事中のことの名曲の作者らゆかいう。満席の客と店は一斉に床に身を伏の前には、パトカを巻き込んで止まった。

翌朝のテレビに上盗の容疑者が警告を自転車で逃走したたーが追跡、追突したは拳銃を発砲、警官たが、取り逃がした。

ゲリラ掃討作戦やモ隊と軍の市街戦なで、弾が飛び交う場度か出くわしてきたはたまげた。なにせ光地だ。五輪は大丈

騒動が終わると、もなかったように食し、さして興奮したい。翌日の新聞で記たらなかった。ニュを認めなかったのだ本へ出稼ぎした日系回多く話したが、日の一番に「治安」を が多かった。納得夜だった。

エヴァ・シュロスさんが語るもうひとつの「日記」

# ホロコーストから生還したアンネの継姉

多賀幹子（ジャーナリスト・在ロンドン）

**オマセで洗練された雰囲気のアンネと過ごした少女時代、その後の悲劇——半世紀を経て言葉にできること**

## 左腕に残る数字

「ホロコースト」とは一般的には大虐殺を意味するが、特に第2次世界大戦の時に、ドイツ・ナチスの手によって600万人を超すユダヤ人が殺害されたことをさす。今年に入ってイギリスは、1月27日（アウシュビッツ=ビルケナウ収容所の解放日）を「ホロコースト記念日」に制定した。歴史を風化させまいとのブレア首相の決定だが、これを大変喜んでいるのがイギリス在住のユダヤ人女性、エヴァ・シュロスさん（70歳）だ。

彼女は、『アンネの日記』で知られるアンネ・フランクの、いわば継姉にあたり、ホロコーストの貴重な生還者だ。15歳の時にポーランドにある強制収容所に送られたが、母の助け、本人の機転、生命力の強さなどで奇跡的に生き延びた。しかし想像を絶する体験を語り出すまでには、その後40年以上の年月を必要とした。今、彼女は、「生き残った者の使命は、悲劇が2度と起きないように後世に伝えること」と言いきる。

シュロスさんの住まいは、ロンドン北部の静かな住宅街の一角にある。私が訪ねた時、前庭にはツバキが美しい花を咲かせ、手入れの行き届いた芝生の中ほどには、りんごの木が枝を広げていた。

「孫たちが遊びに来ると、家じゅうが笑い声であふれるんですよ」

シュロスさんは目を細めた。

現在の暮らしはいかにも平和で穏やかだが、過酷な体験の爪痕は、半世紀を過ぎた今でも決して消えることはない。彼女はそっとブラウスの袖をめくって左腕を出した。私は一瞬、息を飲んだ。そこには「A－5272」と青く滲んだ数字がはっきりと読み取れたからである。

しかも「A－5232」と彫られたうちの「3」には無造作に線が引かれ、その上に「7」と訂正してある。

「係員が間違えたのよ」

シュロスさんは淡々と事実を伝えようと努めるが、自然に頬がこわばる。

「あそこでは、われわれは単なる番号にすぎませんでした。家畜以下の扱いだったのです」

## 崇拝者にかこまれた少女

彼女は1929年5月に、オーストリアのウィーンで生まれた。父親のエアリッヒ・ガイリンガー氏は手広く靴の製造・販売にかかわって成功。母親のフリッツィさんは専業主婦で、3歳年上の兄、ハインツさんとシュロスさんはとても仲がよかった。

経済的に安定し、両親の愛情に恵まれて育ったシュロスさんだったが、1938年、ヒットラーがオーストリアに侵攻すると、ユダヤ人を取り巻く雰囲気は一変する。ヒットラーはドイツ民族の優秀性を強調、ユダヤ人を目の敵にする政策を押し進めたのだ。

身辺に不安を感じたユダヤ人は次々にオランダ、イギリス、アメリカなどへと去っていった。シュロスさん一家も1940年、オランダに引っ越し、アムステルダムのメルウエーデプラン通りのアパートに落ち着く。

ここでシュロスさんは、隠れ家で綴った青春の記録『アンネの日記』で世界の人々に感動を与えたユダヤ人少女、アンネ・フランクと出会った。アンネとシュロスさんは共に1929年生まれだが、シュロスさんのほうが1カ月ほど誕生日が早い。

メルウエーデプラン通りは新しい住宅地域にあって、アンネとシュロスさんのアパートは大きな広場をはさんで向かい合うように建っていた。通う学校は違っていたが、それでもアンネが「読み書き」に優れていることはうわさで知っていた。

アンネは映画や映画スターに詳しかったそうで、「グレゴリー・ペックとディアナ・ダービンの名前をよく耳にしましたよ」



またアンネはかなりオマセで異性への関心も強く、男の子を見ては友達と突っつき合ってクスクス笑ったりもしていた。どちらかというとオクテのシュロスさんには、感受性が強く、洗練された雰囲気を漂わせ、崇拝者に取り巻かれたアンネは少々まぶしい存在であった。

こんな経験もした。ある日、シュロスさんはアムステルダムの洋品店に、母親に連れられてコートをあつらえに行った。先客があったため二人がいすに座って順番を待っていると、試着室での女性客と店員とのやり取りが耳に入ってきた。客の断固とした口調にシュロスさんは思わず耳を澄ませる。

「もう少し大きい肩パッドのほうが私には似合うと思うわ」と言葉に迷いがない。「ヘムラインはもうちょっと高めにするべきと思いますけど」、続けてしっかりした物言いだ。店員はかしこまって、ただ「はい、そうですね」と答えている。

カーテンが開き、声の主を見て驚いた。アンネだった。彼女は11歳なのに、たった一人で仮縫いに来ていたのだ。アンネはシュロスさんに目を止めるとにっこりして、「どう、気に入ったかしら？」と、ピーチ色のドレスのまま、その場でくるりと一回転してみせた。「ええ、もちろんよ」、シュロスさんはドギマギしながら答えた。その時彼女は、アンネはなんて自分の意見を持つ〝大人〟なんだろう、と今さらのように感じ入ったという。

居間のやわらかいソファに腰をかけたまま、シュロスさんは熱心に思い出話を語り続けた。

アンネの家では猫を飼っていた。かわいくて人懐っこいので、シュロスさんはアンネの家に行くたびに背中をなでてやった。ある日、いつものように猫と遊んでいたら、アンネの父親オットー・フランクさんが顔を見せ、ニコニコしながら話しかけてきた。フランク氏はシュロスさんのオランダ語がまだ十分でないと知ると、彼女の母国語であるドイツ語にすぐ切り替えてくれるなど、親切だった。

広場で一緒に遊んだ後、アンネが友達を自分の家に連れていくと、母親が台所でレモネードやアイスクリームをふるまってくれる。台所はいつもピカピカに磨き上げられていて、シュロスさんは、アンネのお母さんはきれい好きだと感心していた。しかしアンネとお母さんが親しく話すシーンはほとんど見なかったそうだ。

「私の人生でもっとも大切な2人の女性」。シュロスさんは母親の写真とアンネの絵を見せてくれた（撮影も筆者）

アンネとシュロスさんは毎日のように顔を合わせる遊び友達だったが、シュロスさんの兄とアンネの姉・マルゴもまた、友人だった。二人は年齢も学校も同じで、互いの家を行き来して宿題をしていた。そろって成績が良く、素直なタイプであったという。

## 悪夢に襲われて

そんなアムステルダムののどかな日々が永遠に続くと信じていたのに、なんということだろう、この地にもヒットラーの手が伸びてきた。1940年5月、ドイツ・ナチスはオランダに侵攻、オランダはほんの5日間で降伏してしまう。ここなら安全と信じていた希望は砕かれ、たちまちユダヤ人への厳しい規制が始まった。

まずは、二つの三角形を逆さに組み合わせたような黄色いダビデの星を胸に付けなくてはならなくなった。映画や演劇などの鑑賞はいっさい禁止され、買い物も、ユダヤ人が経営する店でのみ、しかも午後3時からの2時間だけしか許されない。市電にも自動車にも乗れなくなり、午後8時以降は外出禁止、毎週のように新しい制限が加わり、それはその都度ラジオやポスターで知らされた。

そんな状況の中、オランダの交通関係の組合がユダヤ人への迫害に抗議してストライキを打ち、すべての交通をストップさせたことがあった。また、ユダヤ人ではないのに黄色い星を胸に付け、ナチスのやり方を批判したオランダ人もいた。

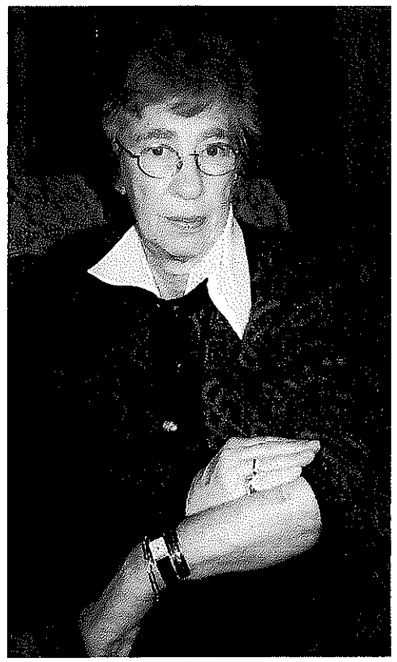
それでもユダヤ人への圧力は強まるばかりで、ついに、母親とシュロスさん、父親と兄、と家族が二つに分かれ、別々の隠れ家に身を潜めることとなった。シュロスさんらは1942年4月に、同様にアンネ一家は同年7月に、それぞれ住みなれたアパートを後にした。

しかしシュロスさんらは1944年5月に、アンネらは同年8月に、共に密告によりゲシュタポ（ナチスの秘密警察）に踏みこまれ、逮捕された。まずは双方ともにアムステルダムの東方、ウエスターボルグ収容所に送られ、シュロスさんらはポーランドのアウシュビッツ＝ビルケナウ収容所に、アンネと姉はそこからさらにドイツのベルゲン＝ベルゼン収容所に移された。

シュロスさんの体験は体が震えてくるようなすさまじさだ。ビルケナウ収容所で家畜用輸送貨車から降ろされると、すぐその場で〝選別〟が始まる。高齢者と15歳未満の子供は「右」に、それ以外の〝使える〟者は「左」に分けられた。

シュロスさんは母親がとっさに着せかけた長いコートと大きな帽子に救われた。それらが実際よりも年上に見せたのだ。シュロスさんは15歳だったが、書類上は15歳でも、〝使えない〟と判断され、「右」に追いやられた少女は少なくなかったのである。まさに母のとっさの機転で九死に一生を得た。

死と絶えず隣り合わせの状況にあって、その後も母親は、必死で彼女を守った。収容所で全員が髪を剃られた時、母親は前に進み出て、「うちの娘はまだほんの子供です。少し残してやってちょうだい」と主張した。母親の迫力におされて



ビルケナウ収容所で彫られた入墨は、半世紀たっても消えない

か、ナチスの係員はほんの少し、シュロスさんの額に毛を残した。そして、「かわいいよ」と繰り返して、母親は15歳の思春期の微妙な心を支えた。

そもそもシュロスさんの母親は、ゲシュタポに隠れ家に踏みこまれたときも、耳を疑うようなことを叫んでいる。「この子は純粋なユダヤ人ではありませんから逮捕しないで。この子は私が浮気してできた子供なんです。相手は、相手は……私が治療に通っていた歯科医です……」と大声を出した。

ゲシュタポからは無視されたが、シュロスさんは自分をなんとしてでも助けようとする母の必死の気持ちを、そのとき胸に刻み付けたという。「どんなひどい目にあっても私は死んではならない。それが母親の意志なのだと思いましたね」。

収容所に入ってまもなくの頃、シュロスさんはのどの乾きに負けて、収容所の水を口にしてしまった。たちまちチフスにかかり、猛烈な腹痛と下痢に襲われる。誰もがもう助からないと予想したが、シュロスさんは奇跡的に回復した。

「アンネとマルゴがこの病気で亡くなったことを思うと、胸が痛みます。私は収容所に入ってすぐに罹ったので、まだ体力があったのでしょう。これがしばらくしてからであれば、やはり助からなかったと思います」

彼女を脅かしたのは、餓えや病気ばかりではない。素裸でシャワーを浴びるときは、決まってナチスの兵士が近くに立ち、ニヤニヤと眺めるのが常だった。シュロスさんは、目をつけられてレイプされることがないように、大柄な女性の陰に身を隠すようにこころがけた。

ある日、いつも励まし支えてくれた母親に恐ろしいことが起こった。「ドクター・デス」と恐れられたメンゲレ博士の選別で、弱った母親が「ガス室送り」のほうに入れられてしまったのである。絶望に打ちひしがれた彼女を、周囲の女性は懸命に慰めてくれた。幸い、母親は親戚の女性の尽力で収容所の病院に入ることができ、喜びの再会をすることができた。

## 生き残った者の日々

そしてついに1945年1月、アウシュビッツ＝ビルケナウ収容所はソ連軍により解放されたのであった。

解放後、シュロスさんの頭に真っ先に浮かんだのは父と兄のことだった。二人が収容されたのは、3キロ離れたアウシュビッツ。凍傷で痛む足を引きずって歩き通し、生存者の間に父と兄の姿を懸命に探した。しかし芳しいニュースは聞くことができなかった。

代わりに、アウシュビッツ収容所の囚人棟内ですっかりやせて骨と皮だけになった男性が声をかけてきた。「あなたはアンネの友達ではなかったかね」。シュロスさんは男性の顔をまじまじと見つめ、ハッと思い出した。その人は、アムステルダムで何度か顔を合わせたアンネの父親、フランクさんだったのだ。

「アンネとマルゴを知らないかい？」、フランクさんが息をこらして返事を待っているのを感じたが、収容所で二人に会ったことは1度もなかったので、首を横に振るしかなかった。

後にシュロスさんは、アンネとマルゴがベルゲン＝ベルゼン収容所で、1945年2月末か3月初めにチフスで亡くなったことを知る。イギリスにより収容所が解放されるわずか数週間前のことだった。

フランクさんは、アムステルダムに帰ったシュロスさんと母親を訪ねてきた。シュロスさんが母親に紹介し、やがて妻を亡くしたフランクさんと夫を亡くした母は慰め合い助け合うようになる。

一方、シュロスさん自身はアムステルダムでの生活に耐えられなくなっていた。アパートの部屋の柱には、父が兄と自分の背丈を計ってつけた小さな傷がそのまま残っていて、見るたびに涙があふれ出る。アパートの前にタクシーが止まる音がすると、「お父さんとハインツだわ」と叫んで玄関に走り出る。

夜は父と兄が助けを求める姿が夢に出て、目を覚ました。汗をびっしょりかいて呼吸が苦しかった。また、死体を焼却炉で焼く独特の臭いが、何かの拍子にツンとよみがえることすらあった。

5年後、シュロスさんは、アムステルダムを離れる決心をする。フランクさんの紹介を受け、ロンドンの写真館で見習いカメラマンとして働くようになった。そしてそこでイスラエル出身の経済学を学ぶ大学生、ズヴィ・シュロスさんと知り合い、1952年に結婚した。

翌年にはフランクさんとシュロスさんの母親が再婚、シュロスさんも心から祝福した。そしてフランクさんと母親は、フランクさんの親類の住むスイスのバーゼルに引っ越していった。

その後、シュロスさん夫婦には3人の娘が次々と生まれ、弁護士やジャーナリストとして自立した。それぞれ幸せな結婚をして、今シュロスさんは5人の孫のおばあちゃんでもある。

## 私自身を癒す

フランクさんはアムステルダムに帰ってまもなくの頃に、隠れ家の生活を支えた協力者のミープ・ヒースさんから、アンネが書きためた日記を手渡されていた。その時シュロスさんらに、「このような日記を綴っていたとは……」と驚きを打ち明けている。そして「わたしの望みは、死んでからもなお生きつづけること！」とアンネが書いているのを読み、「この日記を出版して、望みをかなえてやりたい」と考えるようになった。

「日記の出版こそ継父の生きる力でした。日記は1947年に出版されるや好評を得て、次第に世界中から感動の手紙が寄せられるようになり、継父と母は1通1通に返事を書いていました」

後年、フランクさん夫婦はロンドンに暮らすシュロスさんの家をたびたび訪れ、そのたびに2、3ヵ月滞在するのが常だった。フランクさんはシュロスさんの3人の娘を本当の孫のようにかわいがり、イギリス南西部の海水浴場によく連れていった。

経済学者の夫と、ロンドン北部の静かな住宅街で暮らす

「継父はけっこうヤキモチやきでね。母と私が話したり笑ったりしていると、急に用事を頼んだりするのです（笑）」

その頃シュロスさんには、長く記憶の底に沈めてきた収容所のあれこれを伝えたいとの思いがこみ上げてきた。直接のきっかけは、お茶に招いた友人が、「夫がホロコーストをまったく知らないのよ。嘆かわしいわ」と漏らした言葉だった。あまりにつらく悲しい体験だったため、その体験ともう一度向かい合うのは怖かったが、「知らない世代が増えることは危険だ」「過ちを2度と繰り返さないために語るべきではないだろうか」と思うようになる。

そうして、彼女の著書『エヴァのストーリー――アンネ・フランクの継姉による生存者の話』は1988年に出版された（日本版『エヴァの時代』新宿書房刊）。同書はアメリカやイギリスのマスコミに取り上げられ、「パワフルで感動的な一人の女性の勝利の話」「ホロコーストの理解に最適」「続・アンネの日記といった印象」と好評を得た。

さらにこの本などを下敷きに、1996年、アメリカ人脚本家の手で『そしてついに彼らは私のところにやってきた――アンネ・フランクの世界を追悼して』という劇が完成。まずアメリカで上演されて好評を得た後、イギリスでも、青少年向けの創作劇を生み出してきた1983年設立の「クラスワークス・シアター」による上演が今年1月より開始された。

私も先日、ロンドン北部のゲイトハウスでの公演を見に行ったが、「劇は1時間ほどで終わるが、心には一生残る」と高い評価を得ただけあって、力強い演技に圧倒された。男女二人ずつがいくつもの役をこなしながら、アンネとシュロスさんの体験を生々しく再現する。

終了後にはシュロスさんが舞台に姿を現わして、観客からの熱心な質問に答えた。この劇は英米の学校を巡回し、若い世代に感動を運び続けている。

今、シュロスさんは、民族の対立、人種差別がなお世界中で続くことに注目する。「ホロコーストは、ユダヤ人だけの特殊な悲劇ではありません。いつでもどこでも誰にでも起きる可能性があります」。最近でも、オーストリアの右翼政党が連立政権入りした〝事件〟には、ナチスの悪夢の復活か、と身をこわばらせたという。

「残された命を体験の〝語り〟に注ぎたい。それは父や兄やアンネら犠牲者の死を無駄にしないためでもあり、私自身のヒーリング（癒し）でもあるのです」